

『地図と領土』 第三部における「ウエルベック」 殺害事件とジャスラン警視について (1)

堀 田 尚 吾

はじめに

ミシェル・ウエルベックの長編小説『地図と領土』 *La Carte et le Territoire* は、芸術家であるジェド・マルタンを主人公とした物語である。この物語は、プロローグ⁽¹⁾、第一部、第二部、第三部、エピローグという実質的には五部構成から成る。プロローグと第一部では、ジェドの出生から、彼が芸術家として一定の成功を収めた現在⁽²⁾までの様子が描かれる。第二部で、ジェドは「ウエルベック」⁽³⁾と出会い⁽⁴⁾、個人的な親交を深めていく。しかし、第三部の冒頭で「ウエルベック」は何者かによって殺害された状態で発見され、警察による捜査が行われる。エピローグでは、事件の結末、ジェドの晩年の様子が描かれる。

芸術家としての自らのキャリアを積んでいく中で、ジェドはさまざまな人物と出会い、そして別れを繰り返していく。そうした人物たちとは、父のジャン＝ピエール、恋人のオルガ、ギャラリストのフランツ、そして世界的な小説家の「ウエルベック」などであるが、第三部から登場するフランス国家警察のジャスラン警視は数あるキャラクターの中でも特異な存在であることが認められる。そして何より、第三部はジェドの視点⁽⁵⁾ではなく、ジャスランの視点から幕を開けるのである。

それまで一貫して主人公としての視点を読者に提供し続けてきたジェドは、第三部の冒頭からはジャスランにその立場を譲り、しばらくは物語に登場しなくなる。そしてジャスランから見た世界がしばしば描かれたあと、ジェドが物語に合流し、ジャスランとジェド両者の視点が物語を展開していくようになる⁽⁶⁾。言うなれば、第三部には主人公ともいえる視点人物が二人いるのである。この視点の切り替わり、というより視点の複数化は、どのような意味を持ちうるのか。

本稿では、ジャスランという人物、そして彼の視点も追加されて展開していく第三部によって、どのような効果が物語に与えられているか、ということ論じていく。

文学の門外漢としてのジャスラン

『地図と領土』には、ウエルベックの諸作品と同じように、文学に造詣の深い人物が数多く登場する。しかし、ジャスランはそうした人物たちとは異なり、文学や芸術の類からは縁遠い存在として描かれている。こうした彼の独自性は、第三部から導入される彼の視点に大きな意義を与えているように思われる。すなわち、文学を「知らない」人物のものの見方がここで初めて提示されることになるのだ。

たとえば、ジェドは幼少の頃から世界の古典文学に通じており、文学の素養があることが度々示される。寄宿学校時代のジェドは以下のように描写されている。

Il n'avait pas d'ami proche, et ne recherchait pas l'amitié d'autrui. Il passait par contre des après-midi entières dans la bibliothèque, et à l'âge de dix huit ans, son baccalauréat une fois obtenu, il avait une connaissance étendue, inhabituelle chez les jeunes gens de sa génération, du patrimoine littéraire de l'humanité. Il avait lu Platon, Eschyle et Sophocle ; il avait lu Racine, Molière et Hugo; il connaissait Balzac, Dickens, Flaubert, les romantiques allemands, les romanciers russes.⁽⁷⁾

彼〔ジェド〕に親しい友人はおらず、他人からの友情を求めることもなかった。その代わり、午後はずっと図書館で過ごした。18歳でバカロレアに合格したときには、同世代の若者の中では珍しく、人類の遺産となるような文学について幅広い知識を持っていた。プラトン、アイスキュロス、ソフォクレス、それからラシーヌ、モリエール、ユーゴーを読み、バルザック、ディケンズ、フローベール、ドイツのロマン派、ロシアの小説家も知っていた。

また、長じて写真家となったジェドは、ミシュラン社の広報であるオルガと出会い、恋人関係になる⁽⁸⁾。絶世の美女にして有能なキャリアウーマンであるオルガの紹介によって、ジェドはアート業界、ひいてはセレブリティの世界への階梯を得る。ジェドは小説家の「フレデリック・ベグベデ」⁽⁹⁾と知り合いになるが、そうしたときにも、彼は以下のような連想をする。

« Ça s'est bien passé, avec Frédéric... » lui dit Olga alors qu'ils revenaient à pied, longeant le boulevard Saint-Germain. « Oui... » répondit Jed, perplexe. Parmi ses lectures d'adolescence, dans son collège de jésuites, il y avait eu ces romans réalistes du XIX^e siècle français où il arrive que des personnages de jeunes gens ambitieux réussissent par les femmes ; mais il était surpris de retrouver dans une situation similaire, et à vrai dire il avait un peu oublié ces romans réalistes du XIX^e siècle français, depuis quelques années il n'arrivait plus à lire que des Agatha Christie, et même plus spécifiquement, dans les romans d'Agatha Christie, ceux mettant en scène Hercule Poirot, ça ne pouvait guère l'aider dans les circonstances présentes.⁽¹⁰⁾

「うまくいったようね、フレデリックとは……」オルガがそう言ったとき、彼らはサン＝ジェルマン通りに沿って歩いて帰っているところだった。「うん……」ジェドは答えつつも困惑していた。子供

の頃、イエズス会の寄宿学校で読んだ本の中には、19世紀フランスのリアリズム小説も含まれており、それは、野心あふれる若者のキャラクターが《女性の力を借りて成功する》というものであった。そこで、彼は自分が似たような状況にいることに気付いて驚いた。実のところ、そうした19世紀フランスのリアリズム小説のことは少し忘れていたのだが。ここ数年は、アガサ・クリスティーの小説だけ、それも特にエルキュール・ポワロが登場するものしか読んでいなかったのだ。そのことは現在の状況において何の助けにもなっていなかった。

このように、ジェドは自らを振り返るための参照点として（19世紀フランスのリアリズム小説を読んだ経験が彼に自らの置かれた状況を知らしめる一方、アガサ・クリスティーの小説を読んだことは「何の助けにもなっていなかった」という違いはあるにしろ）文学作品に思いを致す。現実には起きていることを文学に結びつける観点自体、ウエルベックの諸作品において珍しいものではない。『素粒子』*Les Particules élémentaires*の主人公である国語教師ブリュノや、『服従』*Soumission*の主人公である文学教授フランソワも、自らの状況を理解するための視点、さらには人生の指針とも呼ぶべきものを文学に求めている。もちろん、芸術家、国語教師、文学教授という生き方を選んだ人間が文学に大きな関心を寄せるのは特段変わったことではないだろう。しかし、こうした人物たちが主人公に据えられ、その視点が読者に提示されていることは、ウエルベックの作品における文学というものの存在を際立たせている。

『地図と領土』に話を戻すと、ジェドの他には、父のジャン＝ピエールが「ウエルベック」の読者であり、肯定的な評価を下している⁽¹¹⁾。さらにジェドの専属ギャラリストであるフランツは「ウエルベック」にカタログ用の文章を寄稿してもらうようジェドに勧めている。ジェドほど造詣があるわけではないにしても、作中の人物は文学に対して何らかのビジョンを持っており、「ウエルベック」についてもある程度の知識を備えている。そのようにして文学や芸術に関する挿話が繰り返され、また「ウエルベック」は誰もが知る有名な作家として描かれている。

しかし、このような小説内の世界とは別の次元から来た人間かのように、ジャスランは、文学や芸術についておおよそ思う所がないうえに、「ウエルベック」の名前すらも知らない人物として登場するのである。

「ウエルベック」を知らないジャスラン

第三部の第1章は、「ウエルベック」殺害の現場から始まる。部下のフェルベル警部補に遅れて現場に到着したジャスランは、遺体を自分の目で見るとより先に、現場で涙を流しているフェルベルや憲兵隊たちとの会話から、被害者の遺体の状態を察する。ロワレ県にある自宅で何者かによって殺害された「ウエルベック」の遺体は、犯人によって原型を留めないほどに損壊されていたのである⁽¹²⁾。ジャスランは、鑑識が到着してから自分も遺体を目にすることにして、フェルベルか

ら被害者について話を聞く。

« En plus, la victime était célèbre... ajouta Ferber.

- C'était qui ?

- Michel Houellebecq. »

Devant l'absence de réaction de son supérieur, il ajouta : « C'est un écrivain. Enfin, c'était un écrivain. Il était très connu. »

Eh bien, *l'écrivain connu* servait maintenant de support nutritionnel à de nombreux asticots, se dit Jasselin dans un courageux effort de *mind control*.⁽¹³⁾

「それに、犠牲者は有名人でした……」フェルベルが言った。

「誰なんだ？」

「ミシェル・ウエルベックです」

上司から反応がないので、彼はさらに言った。

「作家ですよ。まあ作家だったということですが。とても有名だったんです」

なるほど、その《有名作家》とやらは今では何匹もの蛆虫の栄養源となっているわけだ、とジャスランは思いつつ、熱心に《マインド・コントロール》を行った。

ここで、ジャスランが「ウエルベック」について何も知らないことが示される。これまで「ウエルベック」は誰もが知っている人物であり、ジェドとの関わりにおいても大きな役割を担った存在であったが、彼の死が明らかになる第三部は、彼の存在や社会的な評価を全く知らないジャスランという例外的な人物の登場と共に開始するのである⁽¹⁴⁾。

「あまり読まない」ジャスラン

とはいえ、ジャスランはどのようにして有名人である「ウエルベック」のことを知らないのか。直接的かつ明確な理由とは言えないが、彼が読書というものから縁遠い人物であるから、ということが関係するだろう。

第三部第2章で村を見回ったジャスラン⁽¹⁵⁾は、第3章で現場に戻ってくる。フェルベルはまだ草の上に寝転んで『オーレリア』を読んでいる。憲兵隊たちがいなくなっていたので、ジャスランはフェルベルに尋ねる。

« Les gendarmes sont repartis ? » s'étonna-t-il.

- Quelqu'un est venu les prendre en charge. Des gens de la cellule d'assistance psychologique, ils venaient de l'hôpital de Montargis.

- Déjà ?

- Oui, ça m'a étonné, moi aussi. Le travail de gendarme est devenu plus dur ces dernières années, ils ont maintenant presque autant de suicides⁽¹⁶⁾ que chez nous ; mais il faut reconnaître que la prise en charge psychologique a fait de gros progrès.

- Comment tu sais ça ? Les statistiques sur les suicides ?

- Tu ne lis jamais le *Bulletin de Liaison des forces de l'ordre* ?

- Non... » Il s'assit pesamment dans l'herbe aux côtés de son collègue. « Je ne lis pas assez, en général. »⁽¹⁷⁾

「憲兵隊は帰ったのか？」ジャスランは驚いて言った。

「誰かが引き取りに来ましたよ。心理カウンセリングルームの人たちですね、モンタルジの病院から来てました」

「もう？」

「はい、私も驚きました。憲兵隊の仕事はここ数年でさらにハードになっていて、今では私たち警察官とほとんど同じくらい自殺者を出しています。とはいえ、心理的なサポートがかなり進んでいることは知っておかなければいけません」

「どうしてそんなこと知ってるんだ？自殺率の統計でも見たのか？」

「『法執行機関連絡会報』を読んでないんですか？」

「いや……」ジャスランは彼の同僚の隣に、草の上にズシンと座った。「あまり読まないんだ、いつも」

『法執行機関連絡会報』という雑誌⁽¹⁸⁾について言及されることはここ以外では一切なく、この雑誌が彼ら警察官たちにどの程度読まれているのかは明確ではない。しかし、フェルベルにとっては読んでいることが当然であるような代物について、ジャスランは読む習慣がない。もう一つ、彼が「あまり読まない」人物であることを示唆する描写がある。ジャスランと彼の妻エレヌとのやり取りにおいてそれが見られる。エレヌは経済学者であり、大学で教鞭を取っているが、既に経済学への興味を失ってしまっている。「エレヌの経済学への興味は年月と共にかなり薄れてしまっていた。経済現象や、その進展を予測することは、ほとんど同程度に根拠がなく不確実なものであると彼女には思えてきて、段々と、それらは単なるベテンと同じだとみなすようになった」
« L'intérêt d'Hélène pour l'économie avait beaucoup décliné au fil des ans. De phénomènes économiques, de prévoir leurs évolutions, lui apparaissaient à peu près également inconsistantes, hasardeuses, elle était de plus en plus tentée de les assimiler à du charlatanisme pur et simple⁽¹⁹⁾ » とあるように、経済学は学問として、科学として成り立たないものだと見限ったのである。エレヌは、テレビのニュース番組で経済問題について専門家がコメントするのを見て、ジャスランに以下のように述べる。

« Dans une semaine, on s'apercevra que tous ses pronostics étaient faux. Ils appelleront un autre expert, voire le même, et il fera de nouveaux pronostics, avec la même assurance... » Elle hochait la tête, navrée, indignée presque. « En quoi est-ce qu'une discipline qui ne parvient même pas à faire des pronostics vérifiables pourrait-elle être considérée comme une science ?⁽²⁰⁾ »

「一週間後には、彼の予測が全部外れだったって分かるわ。彼ら〔テレビ番組制作者〕はまた別の専

門家呼んで、同じ人を呼ぶかもしれないけど、その人は改めて予測をするんでしょうよ、同じくらい自信有り気だね……」彼女は、遺憾そうに、ほとんど憤りを感じながら首を振った。「検証可能な予測すらできない学問が、どうやったら《科学》として認められるのよ？」

しかし、ジャスランは彼女の言葉には答えない。というのも、「ジャスランはポパーを読んだことがないし、彼女に対して妥当な答えなど何も持っていなかった」« Jasselin n'avait pas lu Popper, il n'avait aucune réponse valable à lui faire⁽²¹⁾ » ためである。カール・ポパーは「科学的な知識を含む人間の全ての知識は、絶えず反証可能な、暫定的なものに過ぎない」と考えた20世紀の哲学者である。経済学の理論の実証可能性に関連してポパーが引き合いに出されているわけだが、ジャスランはポパーの著書を読んだことはないし、ポパーの思想に基づいて何かコメントができるわけでもない。エレヌがポパーの著書を読んでいるかどうかは作中では明らかにされない（つまり、「ジャスランは読んではいない一方で、エレヌは読んでいる」かどうかは明示されない）が、彼女が問題としている事柄に関する何かしらの見識を、ジャスランが「読書を通じて」得ることはないのである。

不出来な推理小説とリアリズム

しかしながら、ジャスランと読書との間には距離があるものの、例外的に、彼の読書体験について描かれる場面がある。その読書体験は彼の実生活とリンクして、人間に対する彼なりの解釈を裏付けるような働きを為す。

ジャスランとエレヌの間には子供はいない。それはジャスランが精子過少症のためであるが、エレヌ自身が子供をあまり欲しがらなかったこともあり、夫婦は精子ドナーに頼ったり養子を貰うことはせず、子供の代わりに犬を飼うことを選ぶ。しかし、最初に飼った犬「ミシェル」の子供である「ミシュー」は、種犬の高齢が原因なのか、性的機能が十分に発達せず、子孫を残せないことが発覚する。

Ce fut pour eux un coup terrible, bien plus que ne l'avait été la stérilité de Jasselin lui-même. Ce pauvre petit chien non seulement n'aurait pas de descendance mais ne connaîtrait aucune pulsion, ni aucune satisfaction sexuelle. Il serait un chien diminué, incapable de transmettre la vie, coupé de l'appel élémentaire de la race, limité dans le temps - de manière définitive.⁽²²⁾

これは夫婦にとって痛恨の一撃であり、ジャスラン自身の精子過少症より遥かに応えた。この可哀そうな子犬は、子孫を持つことができないばかりか、いかなる衝動も、性的満足も知ることができない。彼は障害を抱えた犬であり、命を伝えることもできず、種にとって基本的な呼び声からも孤立して、一代限りの時間に閉じ込められてしまったのだ——決定的に。

しかし、夫婦はこの衝撃を緩やかに受け止めていく。性的機能を奪われてもミシューは何ら苦痛を感じているわけでもない。ジャスランは、むしろ、ミシューは子孫を成すという生命としての義務から解放された、純真で汚れない存在になれたのだと考えるようになる。この「転向」は、ジャスランがセクシュアリティに対して抱く想いが変わっていくこととパラレルである。

Marqué sans doute par les idées en vogue dans sa génération, il avait jusque-là considéré la sexualité comme une puissance positive, une source d'union qui augmentait la concorde entre les humains par les voies innocentes du plaisir partagé. Il y voyait au contraire maintenant de plus en plus souvent la lutte, le combat brutal pour la domination, l'élimination du rival et la multiplication hasardeuse des coïts sans aucune raison d'être que d'assurer une propagation maximale aux gènes. Il y voyait la source de tout conflit, de tout massacre, de toute souffrance. La sexualité lui apparaissait de plus en plus comme la manifestation la plus directe et la plus évidente du mal. Et ce n'est pas sa carrière dans la police qui aurait pu le faire changer d'avis : les crimes qui n'avaient pas pour mobile l'argent avaient pour mobile le sexe, c'était l'un ou l'autre, l'humanité semblait incapable d'imaginer quoi que ce soit au-delà, du moins en matière criminelle. L'affaire qui venait de leur échoir semblait à première vue originale, mais c'était la première depuis au moins trois ans, l'uniformité des motivations criminelles des humains était dans l'ensemble éprouvante.⁽²³⁾

おそらくは同世代に流行していた考えに影響されたのだろう、それまで彼は、セクシュアリティをポジティブな力だと捉えていた。すなわち、それは結合の源であり、快楽を分かち合うという汚れない方法によって人々の調和を高めるものだと考えていた。しかし今となっては、闘争、支配のための残忍な争い、ライバルの排除、そして遺伝子の最大限の拡散を確実にすること以外には存在理由のない無暗矢鱈な生殖ばかりを、そこに見出すようになっていた。彼は、あらゆる争い、あらゆる虐殺、あらゆる苦しみの源がそこにあると考えていた。セクシュアリティは最も直接的で明白な悪の現れだ、とますます思うようになったのである。そして、彼の意見を変えられそうなものは、彼の警察でのキャリアではなかったのである：金銭が動機ではない犯罪はセックスに動機づけられているのであり、動機と言ったらそのどちらか一方で、人類は少なくとも犯罪においては、それを超える何かを想像することはできないように思われた。彼らに課された今回の事件〔「ウエルベック」殺害事件〕は、一見独創的なものに見えたが、こんなものはこの三年間で初めてであって、人類の犯行動機の画一さは概して耐え難いものであった。

ウエルベックの『闘争領域の拡大』 *Extension du domaine de la lutte* の底を流れるテーマでもある、セクシュアリティをあらゆる悪や闘争の根源とみなす観点をジャスランも持っており、それは彼の職業生活によって強められている。ジャスランが見てきた犯罪はセックスか金銭に起因するものばかりであり、人類の欲望の限界を彼に思い知らせる。犯罪の動機の単純さはそのままジャスランの人間理解に繋がっており、彼の世界観を形成する。

Comme la plupart de ses collègues, Jasselin lisait peu de romans policiers ; il était cependant tombé, l'année

dernière, sur un ouvrage qui à proprement parler n'était pas un roman, mais les souvenirs d'un ancien détective privé qui avait exercé à Bangkok, et qui avait choisi de retracer sa carrière sous la forme d'une trentaine de nouvelles brèves. Dans presque tous les cas, ses clients étaient des Occidentaux tombés éperdument amoureux d'une jeune Thaïe, et qui souhaitaient savoir si, comme elle le leur assurait, elle leur était, en leur absence, fidèle. Et dans presque tous les cas la fille avait un ou plusieurs amants, avec lesquels elle dépensait allègrement leur argent, et souvent un enfant issu d'une union précédente. Dans un sens c'était certainement un mauvais livre, un mauvais roman policier en tout cas : l'auteur ne faisait aucun effort d'imagination, n'essayait nullement de varier les motifs ni les intrigues ; mais c'était justement cette monotonie écrasante qui lui donnait un parfum unique d'authenticité, de réalisme.⁽²⁴⁾

同僚の多くと同じく、ジャスランは推理小説をあまり読んでいなかった。とはいえ昨年、偶然彼は正確に言えば小説ではないものの、バンコクで働いていた元私立探偵の回想録を読む機会があった。筆者は自身のキャリアを30篇ほどの短編形式で辿ることにしたのである。ほとんどの場合、彼の客は、タイ人の若い女性にベタ惚れしてしまった欧米人男性である。そして、彼女が約束してくれたように、自分が留守の時でも貞節を守っているかどうかを知りたいと思っていた。そしてほとんどの場合、彼女には1人ないし複数の愛人がいて、その愛人相手にほいほいと金を浪費していた。以前に関係のあった男との間に子供がいるケースも多々あった。ある意味、それは確かに出来の悪い本だった。とにかく推理小説としてはクズだった。著者は想像力を一切働かせず、動機やプロットを変えようという努力もしていなかった。だが、まさにこの圧倒的な単調さこそが、この作品に真実味やリアリズム独特の匂いを与えていた。

人間が罪を犯す理由の画一性を熟知しているジャスランにとって、犯人の動機が重要なファクターとなりがちな推理小説は縁遠い。実際の犯罪は、推理小説で行われる犯罪ほどオリジナリティーに溢れた面白いものではないからである。しかし、彼が偶然手に取った元私立探偵の回想録は、彼に「真実味やリアリズム独特の匂い」を感じさせる。

ここでジャスランが「リアリズム」を見出していることは、ジェドが19世紀フランスのリアリズム小説を通じて自らを振り返る視点を得たこと⁽²⁵⁾と通底しているようである。だが、ジェドが現実の中にフィクショナルな「リアル」を発見したのとは逆に、ジャスランはこの「推理小説としてはクズ」なテキストの中に現実を見出しているのである。

以上のような背景を持つジャスランは、有名作家である「ウエルベック」を知らないまま「ウエルベック」殺害事件の捜査に乗り出していく。この「無知」はジャスランにどのような視点をもたらすのか。【(2) 以降に続く】

注

- (1) ここでは「プロローグ」としたものの、オリジナルのテキストには *Prologue* など明確な題は当てられていない。一方、「エピローグ」部分には *Épilogue* という題が当てられている。各部で語られる事

柄を時系列順に並べると、第一部、プロローグ、第二部、第三部、エピローグとなる。「プロローグ」は厳密にはプロローグではないのである。

- (2)「現在」とあるが、これは語り手がいる時点を目指すものではない。語り手は固有の人物ではないが、その視点は、小説内で主に描かれる時代（1980年代から2040年代）よりも先の時代に据えられている。その時代ではジェドは既に芸術家として歴史上の人物になっており、語り手は我々にとっては「未来」の時点から「現在」を回想するようにして物語を進めていくのである。
- (3)『地図と領土』で、ウエルベックは、有名小説家である自らを物語に登場させ、重要な位置に据えている。キャラクターとしてのミシェル・ウエルベックと、『地図と領土』の著者（つまりテキスト外の存在）であるミシェル・ウエルベックを区別するため、本稿では前者については鉤括弧で「ウエルベック」と表記する。なお、引用文の日本語訳においては鉤括弧は付けないこととする。
- (4) ジェドは、展覧会のカタログに載せる文章を「ウエルベック」に寄稿してもらうために、彼にコンタクトを取った。
- (5) この「視点」とは、登場人物が作中の出来事を経験していくうえでの視点であって、はるか未来から物語を俯瞰している語り手の視点とは異なる。
- (6) 第三部は1から14の章に分かれている。第1章から第9章までがジャスランの視点、次いで第10章がジェドの視点、そして第11章から第13章はジャスランとジェド両人の視点が入り混じったもの、最後の第14章はジェドの視点から成る。
- (7) Michel HOUELLEBECQ, *La Carte et le Territoire*, GF Flammarion, 2016, p.75.
- (8) ジェドは、ミシュラン社が発行するフランス国内の地図 *la carte* に感銘を受け、それをカメラで撮影して作品とすることで芸術家としてのキャリアをスタートする。その作品をグループ展で展示したところ、オルガの目に留まり、そこから二人の関係が始まるのである。
- (9) 実在のフランスの小説家であり、ウエルベックの友人。小説内でも「ウエルベック」の友人であり、ジェドを「ウエルベック」に紹介する役割を果たす。脚注3と同様に、本稿では小説内の彼に関しては「ベグベデ」と表記する。
- (10) HOUELLEBECQ, op.cit., p.100
- (11) « Il y a une petite bibliothèque à la maison de retraite ; j'ai lu deux de ses romans. C'est un bon auteur, il me semble. C'est agréable à lire, et il a une vision assez juste de la société. »
「老人ホームに小さな図書室があってね。彼の小説は2作読んだけど、良い作家だと私は思うけどな。読んで面白だし、彼は社会に対してかなり正しいビジョンを持っている」
HOUELLEBECQ, op.cit., p.53.
- (12) 第1章時点では、遺体が腐敗し、大量の蠅が集られている以外、具体的にどのような状態になっているかは描かれていない。ジャスランよりも先に遺体を見た憲兵隊や捜査官たちがあまりの惨たらしさに嘔吐したり、茫然自失となる様子から、その凄惨さがほのめかされるのみである。第3章でジャスランが自身の目で遺体を観察するときになって初めて、遺体の様子が描写される。
- (13) HOUELLEBECQ, op.cit., p.280.
なお、ジャスランが行っている《マインド・コントロール》については第三部第3章で説明がなされる。これは死体を目にした際の精神的なショックをある程度軽減するためのセルフケアの一種であり、彼はこれを、スリランカの僧院で《アスプハー》という死体を前にした瞑想の修行を行うことで習得した。

- (14) ジャスランと共に第三部から新しく登場したフェルベルは、ジャスランとは異なり、つまりこの物語の主要人物たちの多くと同じように、文学に親しみのある人物であることが示唆される。第三部第1章の最後で、ジャスランが鑑識の到着を待つ間は現場の村を見回ってくることを告げると、フェルベルは留守を預かると言い、「ウエルベック」の家の庭に座り、ネルヴァル『オーレリア』の文庫本を読み始める。現実的な観点から言ってこのような警察官はあまり一般的ではないと思われるが、こうした人物は、文学のことをほとんど知らないジャスランとは対照的である。また、ネルヴァル自身は自殺した作家であることから、ここでは作家と死のイメージがほのめかされているようでもある。
- (15) 第2章でジャスランが見回った村は、「ウエルベック」が終の棲家として定めたところであり、「ウエルベック」が幼少時代にバカンスを過ごした思い出の地である。だが、ジャスランにとって村の印象は悪い。建物や教会などがあまりに綺麗に整備され過ぎていて、以下のように思う。

tout donnait l'impression d'un décor, d'un village faux, reconstitué pour les besoins d'une série télévisée. (HOUELLEBECQ, op.cit., p.283.)

その全てがテレビの連続ドラマのために作り直された、セットや偽物の村という感じを与えていた。

しかし、「ウエルベック」とのズレが示唆される一方、奇妙な一致という形で「ウエルベック」とジャスランとの繋がりが示される。

ジャスランは警察幹部養成学校で講義を行うことがあるが、そこで彼は生徒たちに向けて「メモを取ることを強調している。

On ne devrait laisser passer aucune journée d'une enquête sans avoir pris au moins une note, insistait-il, même si le fait noté vous apparaissait d'une totale absence d'importance. La suite de l'enquête devait, presque toujours, confirmer cette absence d'importance, mais l'essentiel n'était pas là : l'essentiel était de rester actif, de maintenir une activité intellectuelle minimale, car un policier complètement inactif se décourage, et devient de ce fait incapable de réagir lorsque les faits importants commencent à se manifester. (HOUELLEBECQ, op.cit., p.284.)

少なくともひとつもメモを取ることないまま、その日の捜査を終えてはならない。彼はそう主張する。たとえメモした内容が自分にとって全くもって重要性が無さそうに見えても、である。後の捜査で、大抵はいつも、何も重要なことはなかったのだと分かってしまう。だが、本質はそこにはない。大切なのは、活動的であり続けること、最低限の知的活動を維持することである。なぜならば、完全に非活動的な警官はやる気を失ってしまうし、その結果、重要な事実が現れ始めたときでも反応できなくなってしまうからだ。

「読むこと」とは縁遠い人物であるジャスランは、警察官という職務上の要請とはいえ、「書くこと」にはある種のこだわりを持っている。そのこだわりは「ウエルベック」との繋がりをわずかながら表す。

Curieusement, Jasselin formulait ainsi sans le savoir des recommandations presque identiques à celles

que devait donner Houellebecq au sujet de son métier d'écrivain, l'unique fois où il accepta d'animer un atelier de *creative writing*, à l'université de Louvain-la-Neuve, en avril 2011. (HOUELLEBECQ, op.cit., p.284-285.)

奇妙にも、そのようにしてジャスランは、彼も知らないことであるが、ウエルベックが述べていた作家という職業についての教えとほとんど同じようなことを言い表していたのである。ウエルベックは唯一度だけ、2011年の4月に、ルーヴァン＝ラ＝ヌーヴ大学でクリエイティブ・ライティング講座の講師を務めたことがあったのだ。

また、こうした偶然はもう一つある。村を見て回ったジャスランは小川を見つける。その流れの一つを辿っていくと、小さな池に行き着いた。

Il s'assit dans l'herbe épaisse, sur les bords de la mare. Bien entendu il l'ignorait, mais cet endroit du monde où il se tenait assis, fatigué, victime de douleurs lombaires et d'une digestion qui devenait difficile avec les années, était l'endroit précis qui avait servi de théâtre aux jeux de Houellebecq enfant, jeux solitaires le plus souvent. Dans son esprit Houellebecq n'était guère qu'une *affaire*, une affaire qu'il présentait pénible. (HOUELLEBECQ, op.cit., p.285.)

彼は池のほとりの生い茂った草むらに座った。もちろん彼は知らなかったが、腰痛、そして歳を取るごとに厳しくなっていた消化不良に苦しむ彼が座っていた、まさにこの場所は、子供の頃のウエルベックの遊びの舞台となっていた場所そのものだった。たいていは独りで遊んでいたのであるが。彼の心の中では、ウエルベックはひとつの《事件》に過ぎなかった。骨の折れる仕事になりそうな予感がしていた。

定年を間近に迎えたジャスランの身体的な苦しみは、物語に登場する老人たち（「ウエルベック」やジェドの父）と共通するものである。年老いたジャスランの身体が「ウエルベック」の子供時代に縁のある場所に重なることで、「ウエルベック」の老い、さらにはその生命の終わりのイメージが強調されて見えてくる。とはいえ、このような一致は偶然でしかなく、何かしらの連帯を可能にするものではない。ジャスランにとって「ウエルベック」は職務の上で持つべき関心の対象でしかないのである。

(16) 「自殺」はこの物語において繰り返し現れるモチーフである。第一部で、ジェドの母はジェドが幼いころに自ら命を絶ったことが語られ、さらに第三部では、ジェドの父が老いによる身体的な苦しみから逃れるために安楽死を選ぶ。ジェドは両親ともに自殺というかたちで喪うことになるのである。

(17) HOUELLEBECQ, op.cit., p.287.

(18) この雑誌は現実には存在しない架空のものである。『地図と領土』では、実際に存在する新聞、テレビ番組、人物などについて描写されることが多々あるが、その中には架空の物事についての描写も紛れ込んでいる。この脚注では簡潔に触れるに留めるが、『地図と領土』では、このように「リアル」と「フィクション」がモノのレベルで共存しており、このことは作中で「リアル」と「フィクション」の両者にどのような地位が与えられているか、両者がどれほどの重みを持っているか、という問いに繋がるものだと思われる。

(19) HOUELLEBECQ, op.cit., p.326.

- (20) HOUELLEBECQ, *op.cit.*, p.328.
- (21) HOUELLEBECQ, *op.cit.*, p.329.
- (22) HOUELLEBECQ, *op.cit.*, p.303.
- (23) HOUELLEBECQ, *op.cit.*, p.304.
- (24) HOUELLEBECQ, *op.cit.*, p.304-305.
- (25) 註 10 を参照のこと。